

円満想続の3K「感謝・絆・供養」

月刊ニュースレター

想 続

Vol. 19 (2012年4月号)

発行：一般社団法人 日本想続協会

〒107-0051 東京都港区元赤坂 1-4-1 岡野ビル 4F

TEL 03-3404-1225 FAX 020-4664-9664

E-mail info@n-sk.org (担当：内田)

☆定期購読（無料）をご希望の方は上記へどうぞ！

母が遺したユーモア

こんにちは。想続塾塾長の内田麻由子です。あなたのお母さんはどんな方でしたか？ 今月は、ユーモアという愛を遺して逝った二人の母親のお話です。

お一人目は、足利市の金井隆久さん（43歳）のお母様です。金井さんは『大法輪3月号』に「母の記」という題で、次のような手記を投稿されていました。

母はどこにでもいる平凡なおばさんでした。学歴は中学卒業で、とりたてて特技もなく、もちろん美貌でもありませんでした。ただ御飯を炊くことと蒲団を寝心地よく敷くことにかけては誰よりも上手でした。…中略…母は長らく慢性関節リウマチ病を患っておりました。そうして還暦を過ぎてすぐ胃癌のため入院し二ヶ月後亡くなりました。

亡くなる少し前、自転車の話を私にしました。何年前のことか判然としませんが、なんでも、ある日懇意にしている近所の自転車屋さんで高圧空気注入機を借り自分で空気を入れたそうです。ご存知のようにあの機械はたいへん強い力で空気を押し入れるので、ほんの短い時間だけチュッと押し当てればタイヤいっぱい空気が張ります。ところが母は、「どうせ無料だから、たくさん入れよう」と欲をかってずうっと押し当てていたそうです。とうとうチューブ内空気圧が上がり過ぎてドカーンとタイヤが破裂してしまいました。「バッカーンってすごい音がした」と母は言いました。チューブが駄目になってしまったので、結局は数千円支払って交換してもらったとのこと。さすがにばつが悪かったのか私に隠していて、その話はその時が初耳でした。末期の病室で大笑いしてしまいました。自転車を爆発させた偉大な親をもって私は幸せです。

…中略…（母が）息を引き取る前、私は繰り返した数々の親不孝が申しわけなくて、「俺はお母さんの子に生まれてよかった」と謝りました。母はもうしゃべれない状態。見る間に母のまなこが赤くなり、涙が溢れ出ました。それが別れです。

☆ ☆ ☆

もうお一人は、上智大学名誉教授であるアルフォンス・デーケン先生の友人のお母様です。デーケン先生のご著書『あなたの人生を愛するノート』より。

彼女は11人の子どもを立派に育て上げて、91歳で死の床にいました。おそらくもう数時間しかもたないだろうというので、11人の子どもとたくさんの孫が集まってきていました。長男が「残念ながらもうお母さんと話すことはできないけれど、みんなで祈りましょう」と言ってミサを捧げて祈りました。ところが、ミサが終わったとき、母親は突然目を開いて、「私のために祈ってくれて有り難う。ところでウイスキーを一杯飲みたい」と言いました。あと2時間くらいというときなので、みんなは驚きました。あわててウイスキーを探してくると、彼女は一口飲んで、「ぬるいから氷を少し入れてちょうだい」と言いました。子どもたちは慌てて氷を探してきて入れますと、母親は「おいしい」と言って全部飲んでしまいました。そして今度は、「タバコが吸いたい」と言いだしたのです。いよいよ長男が堪りかねて「医者にはタバコを吸ってはいけないと言っていますよ」と言いましたら、母親の返事は「死ぬのは医者ではなくて、私ですよ」でした。そしてタバコを吸い終わると、みんなに感謝して「天国でまた会いましょう。さようなら」と言って、静かにそのまま息を引き取りました。

…中略…この母親は生涯ほとんどウイスキーやタバコを口にしたことはありませんでした。なぜ死ぬ間際にこんなことをしたのかというと、恐らく彼女は今まで何回も友だちや親戚の葬式に出て、みんなが涙を流して悲しんでいたことを思い出したのです。そして自分が死ぬときには、子どもたちを悲しませるのではなく、明るい雰囲気のコメディを作って、それを自分の思い出として遺したかったのだと思われます。この母親はユーモアによって、子どもと孫たちに生涯忘れられない貴重な愛と思いやりを示したのです。結局、人間らしく死ぬというのは、人間らしく生きるということです。そして最も自分らしく最後まで生き抜いたということでしょう。

☆ ☆ ☆

デーケン先生曰く「ユーモアは愛と思いやりのあらわれ」です。私もこの二人の母親のように家族にお別れできたらいいなと思います。いまからネタ帳をこっそり書いておかななくては…。(内田麻由子)